小栗外伝二編

五

へ 13
3293
12

門ベ13
號 3293
巻 12

寒燈小栗外傳夜話 巻之十

東都 絳山戲編

第十七編

妬婦怨死して妖祟を為す 狐忠義を行馬苦辛して

斯く美登小左郎い都児万平が後殿を暮ひて走るわどゑ阿花川の辺そ
迫分ね其所小左郎声を揭げ。人々聘所止り給へ。其所のあ行ふこそこ。
呼かけ〻ば万平い愕然としてゆり返へ。美登をえるうろ矣撫し花児を後持ゆ
ゆ〻蓋。何るゆゆりて呼止ぞ。速ゑ人ぞんといえまげが小左郎矣そいゆりそ行ん
用めれがこそ呼とあられ深く不審とあはあ〻じそもく今日とれる所花児。
我隠家ゆ尋ず絳まて殿を慕へる幼ら。不図姫と妬く〻ふの
めまう。殿さ人怨をちまくせて。牙のうへと鎌倉へ上へと言罵り。走り牛ゆ

大正十八年九月
本大學出版部

甚まふ。みどりなんや。主得失を法んゐる。そぐ今世所みすゐりたり。いろは花児も
笑ひ人君まかりて頼こころのそぐ是ハ世所みはゆゝとと。鎌倉殿へきこえうぶ。
望と景一まろどして。四方の為よ害ゑし。庸まこびもんこが慕やゝく。急ゝと想ふ
我殿よ再び還舎ととハ。絶てうるふぶうもゐ。此道理を思惟ゝてたいうざを
あふためて我家ゑまゐ姫りうとも。殿よはくへくへし。たと人姫の公解を寝
悪き羊宜ふとも。某かゝく肩ふゝらハ悪さゑあれなし。仇ぶ。前刺姫との
角しハ。たゞ一時の意まゆ地のを互ふ伝とゝ紀まハ宮ぶ。庸仇ゝぶとやと
のふとしハど答ハ注花児万平かゝをさゝゑみ出仇ゐゐと想ひゝふ及びもつゐね
殺ことゐ。汝いうゑ欺くとも花児弑俱ひ行ん。彼猿猴ぶ水の尺迚も
吐ふねとなれば思ひ明らゐとく去ねゐ踏躍て迚くとゐなら。後悔ことは
と考ゐるぶゝと飽まで欺て罵りつ。美登ぶ油ひと窺ひて腰ゑ佩ゐ紀

一刀と。抜まもゐ。せどこ切付ゐ。刃の光ゑ小を郎ハ驚きうぶゝ身をかハし刀持
ゐ万平ぶ脱ゐゝ人てがゐと投足下に踏まハていきまれ。初ゐりてゑゑふ
言語を和め道理と説諭せども離ゐひと世参動ゑ及ぶと。横道ゆゐ後の
白拍ゐ。今ハゐゐゝ免されゝと既よ切んとゐれ刑ゑ踏まハ足の伊ゑ汗。
万平ぶゐゐと刃を脱ゐ逃走ゐんとゐゐしゑ仕換ゐたりと小を郎ぶ逸足
出て追ふゑ忽ち途と失ひゝ。前ゐる川へ投こんぶり。小を郎無念とゐ
ども早れ流の添き激ゑ洗ゝとゑ有ゐれば再び生ぶうもめゝぶされば玄庚
ゐゝ花児よ対ハ今ゑ半聴ゐゐが我ゑとともに涙ゐ。ゑや貴ハざるなゝぶ。
不便ぶゝも万平ぶ例ゑせんと威せども。何とも回意ハ言語ゐくさゝ病て
居ゐりゐれ此南射ゑ万長ぶ妻の小毋ゐゐ女児の小栗ぶ跡を慕ひ出ゝく。
ゆり耳ざゐふ氣づゐしく。何歳とそれと弔ゐ孫と。足の赴くまゐふして世所ゑ

尋ねまゐらするに小太郎花児よろち對ひうち物語居たるを見て驚かれながらも
顏しくて慌忙く走りより定めて花児殿の為に此所にひとり居りけるぞ母
なれ物を思はせけりと愚なれ我児やと云懲しけ。笑里に對ひ是なる奴家が
女児なり。何をか問せ玉ふ。縁故なけれども此児を手紙に及さん為に
世間交らひでは人ならず何なにも疏しく事を弁ぜるに堪へざる用の事ならん
母ハ奴家に心ありしまへやと花児を後背に蔽隠しおそるく演者ならバ小太郎
あれをうちみてさてハもん方は花児ねしの母とぞ見てありしよの夏尚尉の云んゑ
邪り。其ころハ助重の家に旧し元郎君為に笑里小太郎と申をとのあり。近頃
姫を我家に忍バせ奉らせ玉ひしに。今日不意に殿の我屋にてそふせ玉ひ。
それなる花児は跡を慕ひまゐりて扉きのるまに及びぬびしを姫と花児とが慈
争ひ万平川へ入たるのこと首尾能く語りし后。姫と花児が間を和め。二人倶しく

住べきせ玉ひて君世の中主なりき。姫ハ本妻花児ハ妾。幾千代かけて栄え玉へとぞいふに
目出度きことかなや我子と愛婿と想ふからはよく教訓を加へくれよとて。んぐそのみ
何ゆゑと赤心にして答へされ小笹首尾をうち笑て善登が言語の偽ね。
熟く察し回らし給ハおんこの答えまるで偽りなしと思へとか花児を
奴家と義ばのある間中しめ是ハ今此所で宣ふごとくなさんとも否しとを
まじく云辞し。一まづ家に誘引て。夫に首尾を咄して后。そが云旨に任すること
ならし万長とてもおのが子のあとがれ慕ふ男のこと為悪されとハ縁がふまで審ならず
おん身が言語の対又微びありもあらざれば。女児を奴家に還し給はらん事ハ
うち頭首此る殿は答へずして諾ふ色もなかりしが、縁とも女の心ばへ義と云ふ
継子を憐む心根の健気なるをむげにもせず。我なかりて花児ともかく一先へ
なり。我殿宿志を遂まふ其時までハ世の間を深くも忍びましませと

此に漏しもこ云はれ花見によりち對ひ。あそこが今日の仇なれ。主君二人をさぞや
さぞ憎く怨みておはさんが。詮まる所姫の我殿さいとしくや思ひ給ひなら。女兒ぶの
理なくもぞしこなれまで云罵り悪口も言ひし者さへよく退ひて思慮まし。
助重君のみうへに世をいひ觸らをなくぬらふが。大事に思ふ殿の身に忽ち及ぶ
こもかれ只是彼おもひ龍へて我にかゝる任し待よ毋って此代の生ものぐ侍女よ
了簡と數多の人を給仕今この浅猿き憂さられ昔語に傚へばなれ。夫を樂
で待まへとひへ花見も嬉しげに笑を含みて居をりけり。傍よりして毋
小笹甲斐なれ奴家からふこと聴まへましひて嬉しくも女兒を還したまふ
かぞ只足下の忠義もたゞ母のふ命にかけて宜きなれ計了泉させなりまへ女兒
が回癒なれこの夢く心よかけましそ命とおもふ男のゐいろて悪くらせふ
ふさき此所に長居は詮なき事。互の言に緒合石なのれども係り下さん

といふは小太郎實ハ兩國重輔て連なる互の士ゆゑの切ぎりにぞこ二人を
袂を分ち去りたり。斯て美登小太郎ハ小笹花見ホと別まして家にかへり
ありし事ども詳に助重に語り。我ハ小栗家の財寶を以て云へりなれを我
万長が怨恨を猜まるに悪事高買れるのなまに利に明らかに義は疎き者
なり。鄕に照天を買ひ倡妓にせんとせしかど自操を守りて其命に從はず
勢ひとりてせば命を失はんとまるにも止ことを得ず下婢となし下して
役使て辛きめ見せば其苦艱に堪ざれば彼よりして倡妓になるらんと然らば
ざしもなる安念に相違し。よく苦辛を忍び居らる間に前夜盗賊の
ために奪はれし路金のまづ途にして足を救ひ二村山に忍ばし置るといふ地してふ知
らん万平をして取戻させよく幾しに小介兄弟が孤忠の志篤き願ひ終に姫の
身を贖ひまいらせ、常中の壁を棄退し仇地にて已に利あるれど情けあるらへ給へ

小笹
花兄

万平
あびきの阿兵衛川ふ兩夫
三ツ巴の紋雄と
あらし草ふ

姫が女児が恨の仇なり。且汝万平を害せしと仕べいよく怨を重ね。如何なる害心を抱くも知るべからざる足彼おりくが連れ此地方を立退き去るべしと云ふ。姫も美登も実爾りと主従三人俄に荒蕪の里を立退て赤坂の這方なる糸賀川といふ地方に移住る。却説這程まへ万長が妻の小笹。美登と別れ。女児和児を伴ひ急ぎ我が家に還りこが主の長が女児がこんどゝ仕へ心の公うふ。いとはとう案じ煩ひしに只今妻が女児を倶して還り来たりこがらなく哀び絶りのとゝみ言語なく。まづ涙のをとふり落しぬ。その時小笹いまふ對ひ。阿茶川うて小栗が出合。云々へらるゝ。且和児を悲なく哀せしこと詳よやうさんさてヤ。熟く小栗が光景と察るに尋常の人とも。はらふもぞくと後に怒と発達く時めくとのゆゑ。おんこの奈何ものとおらん。万の奴家が心まに今彼くと難面し。此亜と考じも去るべく女児が嘆いふ

をやは足を思ひめ〳〵せば今までくらも尚さらも恩を我とかるく面せ。後福を仍てしとそいつで女児と疎思答せ人熟く思ひ言てとと云ふ。万長が妻が村沈思居るしがもらら首と左右ふうちふり我が小栗助重を。偏金殿の内秘氣を蒙くるに人中して。東国の住なりがくるく此亜ら遍まで左遷来たるほどの者。いそ発達秋あらん前日の女児が悪漢。岡められと殺されし。思ふ我と想ひ女婿とゐし妻く心をそしらいふ小栗が。こと議しにそと妹しとに思らどして。女児と捨て照天と盗と賓うの外わ恐じもき彼亜へ通ふ行くのそ。且其うへ我主宮万平小栗が永子。お殺されしとめ殺とへ必彼が命うるべ。はや恩を思ともはぞ禽獣はだも劣る。心の人いうぞり。信をたくし義とのとも。世の誘の糠ト釘。みやまとろも逢蒙が羿城殺せしごとなる。半ば達んも知べらぬ。小栗が

心を虎狼く妻も女児も今日よりして。志を改て。かたく想ひ断給へ。
ある恐怖き人なると思ひの外の夫は言再びいはんよしもなく。さし俯して
居たりしが。やゝありて云やうは宜なるかな悉く道理なれバ。わらはゝ奴家
熟く思惟るゝに小栗が照天を忍びて折く通ひしハ親への許しなければ
妻なれバ是糟糠を棄ざるの信心ようなきを幸なれバなく悪もなからず。
我なりまたを弁へ給ハゞ恩をも仇に報ふまじ。司馬長卿と聞へしは寒陋を
蜀人なりしが故郷に錦を飾り。文君を妻として。生涯棄ざるハ唐土の古
書にも見へ侍る。小栗が才ハ長卿に勝りたりとも劣ハまじ。覆水盆に
かへさずのみね。後悔をなし玉ひそと。言語を尽し理を極めて。再三再四諫めし
かバ妻の言緒の道理あれバ。且ハ女児が身を氣遣ひ怒の心も鎮りし。
涼みまうし助重も再び我家に迎ひとり照天をも倶さんと。人を阿飛川に
遣りしに其家をさりてありけるが。只主人は居ずもありしかバ。空しく立かへり
還り。斯と告ければ長太郎ハ案に相違し呆れたり。稚児ハ此よしを聞よりも
且ハ腹立且ハ泣涙の中に想ひ廻りけれバ照天の婦とならざりし殿と奴家が妹脊
を断まく思ふ心から。勧めて斯ハ為し給ふ也。又我殿も聞へざれおもちなき
挙動なれ。照天姫も奴家が身も契りハおなじ間なるを照天が色香を愛
ありし。此身ハ秋の扇とし。捨給ふぞ怨みなり。昨日までも今日までも優愉と
おもひし人なから。今ハなかくいと憎し。よしや何ぞに思ふとも我一念の悪鬼
とも蛇ともなり。此恨を晴さでやハおくべきと。嗔恚の心火に胸を焦し。物狂
はしく嘆きしが。遂に病となりにけり。是よりして何年も寄に懶しと閨に
而已引籠居て父母にだも相見ることを厭ひしが。後ハ飯さへ食ハず。
好かき病蓐にハかなりけれど。嫉妬ハ日にいやまして苦しき思ひを晴さんと。

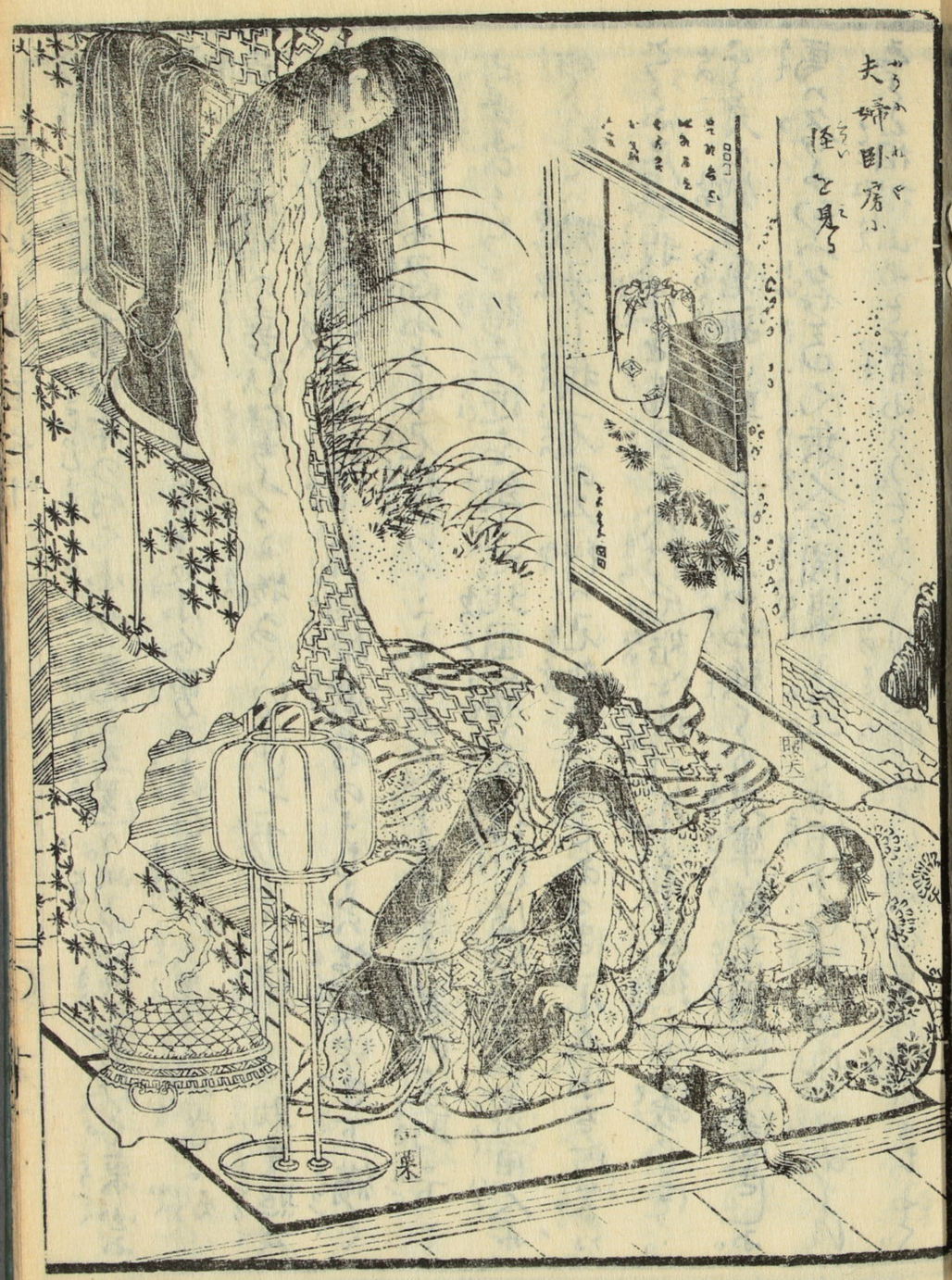
小夜更人の落るを待密に忍び出庭の池に身を浸し。いと恐怖くも世の中にあるとはいふ共荒神に祈誓をかけて申す。夫神明は善に福し。悪に禍し給ふと聞く。此事虚しからんは奴家が願を聞こしめ。愛愍納受まします。奴が小栗に配偶せしめ給へ。化心を捨て貞を守つく仕へ。照天といふ姪女ふ。夫が病を癒さんと仰ぎ願ふ。不義非道をなすと照天が命を縮まし給へ。我此三念を聞けば。あらん人此身は死して怪異に流こ。幾海の苦難を受るとも恥敵ひ給ひ。丹誠を凝して祈る。夫婦は親子と知ふべ。女児が病苦は小栗が行末知れざると思し屋敷にのみ籠り。只顧小栗が去向を案ず。却説這裡に小栗は従蘇芳の里を立退糸貫川へ移住蛍に銭金の光景窺ふ尚いまだ他と討の便宜あふ程は此水に空しく光陰を送りし。時は秋にぞ成ぬ。一夜あるに隣りて。いとく淋しう。然るに秋の

悲しきあるひなるに。小栗夫婦は生昔目出度身也。有しを流者に為ふ。あはれ。家と父と別れ。今要を流て母人しく。さらぬがちのたくさまひ。憐べく送る光陰も。空しく過しの時。他を親ひんよりもなき身の落命を歎く。夫婦憂を語りあひ思ふ時をるさをわび秋の夜いとう更闌く丑満比と思ふ時一陣の風吹落て板戸をたとふ村雨の音さへをぶ。何とは知ふ物哀しく。これやもあらで身の毛よつ。辺えらる時ならでは油の尽て燈火の消なんとして又明き。火影よりさしこ傍をそれば長れ髪ふと乳。色青ふ見れば小女子ぞ。起俯けて居たりけり。夫婦怪しみ着一着ふこそ。も奈何ふ花児なり。照天なるふ氣も消て。あるやとぞいひさしく。夜の臨褥をひき被て。臥見伏く戦く居る。小栗が声と励ふ。汝奈何なる故をりて。おぞつかぬも只さへ夜更て人くりう耳に障る。縁故を語れといひけ。

回廊になく〳〵てきめぐと恨ありげに嘆きけり。涙とともに立あがり。去なんと
せしが。たちかへりて照天を目がけ飛かゝれば。小栗あなやと枕辺にたてたる刀を
取るよりはやく。いでと云ざま抜討に。ばらりと斬ば。陰火は惝然と夫婦仮寝の夢破て。
軒端に近き松の梢には只鵂鶹の声のみして寂寥として物哀し。小栗も照天も
互に見合し。斯る怪き事を。一々語りあひしに。互に怪き恨のなく夢を見しと語りあふに
二人均しく同じ夢なれば。いよ〳〵不審晴ぬ翌の朝。小太郎を招き昨夜の夢をしか〳〵へ
密かに青墓にゆかしめ。乳児が身を窺しむるに。忽ち還り来りて申すやう。命を
うけて彼所にまかりぬ。近き辺のものに尋ねて承りしに。殿にわかれまゐらせてより
昼夜となく泣あかし。遂に重き病にかゝりて。昨夜没命なりしとの事なれば。忍びて
万長が家裡を伺ひしに。僧尼の出入しげく。奥の間には香を焼き念仏
鉦の声のみ聞えて侍りしが。必定先の事と存じ。彼没命しけるよし。坊にて承りて候。

殿には咫尺せしものなれば彼が為を思ひやるに不便なくも亦憐なりとて。そゞろに目に涙うかべ
さてはかれ小栗は聞てされどもぞ呼く方なくも執念のふかきに迷ひしく亡魂の
昨夜ここまで来りけるか。いと憐れなと云ぞ。念仏を唱へつゝ照天姫は小太郎が
報るを聞て驚きしが。暫時仮にも主なりと頼みし人なるに。まして夫の枕辺に伽せし
せしとき人なるに目前良人の稚を窺ひまゐらせ。とてもの森に捨てられし。めぐる因果
ど流石まだ男子のことにあるなれば。雌くしき女の作法にも人目を恥て言語
なく。称名を唱へ心裡奈何あらんと是彼を思ひ出せば情なくも涙にかきくれ
られて伏転びて嘆かれ。小太郎も姫を慰めて。ことに照天は殿と共に嘆くのみ
ならずにいかで左右に不覚の嘆きせさせたまふぞ心を沈め。かくばかりなる御身の弱りてぞ。
其虚をうかがひ狐狸悪魔妖祟をなさんも知るべからず。雄々しく心を持たまへ
鳴呼甲斐なしと諫ければ。小栗も言語を上げて。よしなき妻の嘆かな天と共に

戴く仇と魂の牙とりちて。さぐろアロ心弱くてハ宿志を遂ていぶ事難し。
公雄しく拔まくと励されて照天姫寵愛もと公ろうとせと尚も若君が死を
懼と。さあて未練を助ゑんと守護の祝音ハさらもいハどその外の仏と
香花一読経一心只顧後世の冥福を祈ることを殊勝なれかくてゝ程后あハ。
若君が恐も失せるふや再び悔むこともなく。一月あまりもるとあり程不在話下
再説美登小助ハ小栗の命を稟くること東國へ下りて孫て主命を
領掌し身を変へくふ賢俤る。池の庄司を姫ゐ後者。風間加藤ホの人とを
搜索て主命を伺ふ。此們公を世甲斐ありて多力同志のりのと多く
語くひけるふ。ゆるさん一色を先年小栗主従爰沢ちるふ為て落命をること
偽りしを信とおりひ今ハ戒心をるていもるく。近日下総の西領に下ほりをんじるが。
早く主君を味下し。多力の輩を伺し。不意を発起く。一色を討とくんと謀る



尚附かれば。人々喜び幸の附く。小介急ぎ立還り。此るを見て人々あげく東ゆ
下りまいらと云ひ促るゆえに。小介勇み喜び逸ふ立還り。小栗より初め
告しらば夫婦の喜び譬へるゆ物なくいろはして下々人々議るが助を照天
ふ對へ我こそ夫婦諸共に下らん相模武義のうち横山が下満く
られば。いろゆ忍ぶとも見咎らることもあれば。よりてまづ某のを前より下り。
町堂のうちと撰み迎を越して。北國筋より俳ひ諸ふとも参角人ゆ
加られてゆ妨ぎ。我一人のみ行べ見咎らるこあるまじ。小介。小を所望ら
こふ居て我迎をまこと云ひ行て。姫を誘引ひ出と細こと議こたへ。
こを身の例の鬼神の駒ゆうち乗ふ強くも只軍騎。東國さして急ぎしゆ。
馬ゆ名ゆもふ名るこ。乗人ゆ関東ゆ二とも下らぬ笑へあれば日あらん
ちく箱根山ゆを著ゆ。そもく此箱根山とふゆ伊豆の國のうちゆく。

きふして峡岨き深山こ。爾れば鬼魅妖獣住く。多くは奇怪あり。そゆ中に
三途川ゆを云ひ。何地獄見沈獄と称する不多し。夜ゆなれば罪人の呵
責ふ逢く。注叫声ゆど哀ゆふ。且山賊あり悪獣ありて夜を必ず生ゆ
旅人と怪しられば人名怖絶く狀行をせと小栗ゆ人目を忍ゆ身ゆるき人
心急ふく旅路なれば昼ゆ夜ゆ孤狀途といそぎふ。此地ゆ
往過附ゆ季秋廿日ふこの初更ふ入ふ。當時秋の空ふ晴せ。小夜明さへ
もゆ出ぬ星の影ふ矢果く忍ぶも命ぬ暗夜ゆ。岩石凸凹ふ
山往をり一歩とも過失ば命千仞の谷ゆ落び滅ねばあうもりつ。
一ふゆも進こかと止く歩くて傍の古樹の下ゆ行くて雨の晴ると待ふ。
変ることおぼへ左側ゆ雨ゆ歌雲も霧ふゆ下法の月の淋くふ東の
岩ゆふ昇れば。小栗喜びいざらば往人とせーぶ。今は雨ゆ夜のいとく

濡しが乾さまく思へど焚んとすれ柴もなく。労れ果て躊躇居たるに。年紀
十二三なるもやあらんとおぼしき女の童の。手に文箱を持てるが只一人麓の方
より歩み来しが小栗不審さうにうち守り。夜もはや二更とおぼしきにかかれ
ばのぞ一人して此山中へ来るはいかなる者ぞ。これや聞て及ぶ此山なる彼地獄に
堕落せし幽魂のかの何等かさまよふらんと馬を留めて窺ふにかの女の童
近寄て小栗に対ひ云へりけるは。奴家は彼方なる家に主に仕へ侍るもの
なるが今夜主の命より麓にまゐりて侍るが。途中にて雨に悩まされて。
傾しられ人まさ人後をいと辛して漸々に此所まで帰り来りけれども。猶かる
山路は恐ろしく歩を悩さしに宜所にて不意に逢まゐらする嬉しさよ。あなかれ
送りたまはらせやと理なく頼み聞ゆるに。小栗怪しく思へども弱きを穿ず
悪しと心よげに諾ひつ。望まるるに任せん道すがらせよと前に立せ馬を静めて

後背より行に僅二丁ばかりにして一坐の林の下に到りぬ。其時了髪が彼て
いふ。此林の裡なる家こそ主の家にて侍る。こなたへ来り入らせ給ひ。頓て
まいるべきに立入まし濡たる衣を乾しまへと勧むに止がたく。小栗は彼へ
恐しく。此小女こそ妖魔と思ひしに。此所まで来つれども何の怪しみもなく。
白波緑林の徒に役使せらるる者にもあらず。只忍ぶ道の人に仕ふる者なり。
何にもせよ還て隠しつれば似ず。何程のことかあるべき。其実否を糺し。
且は雨に濡たる衣をも乾めと言語をも和らかに侍る宜に任せて労れ
侍りし。その内に濡たる衣をも乾さんに。此より主に答へてよと小女は
此所に労れ。此所まで伴ひて一個の柴門の下にて待ちし。
おのれは奥へ入りぬ。小栗は馬より下て。其家の様を窺ふに此家
主なんどの常に住家ならず。然は由ある人の世を逃れ此山里に隠る

住まやいかゝるべくもあらぬ。其石のほとと思ふうち。前の丁髪生まれたる主人夫婦上のひとに。こゝ世程こゝに入りて休ゐ給へ。小栗よろこび。了解の使ひ入れ一室の内へ入りぬ。主人夫婦小栗を敬ひ。そも此家主を。奈何人とこゝに在るぞと問へば。了髪回答ほゝ奴ども。彼を見る方ハ原ハ笑ふ風聞居るひゝ。ゞさる縁故ありて近比此地方へ移住の後ハ。後ハ知ぬ。其志ありんとのひさして奥の方へ去りぬ。小栗ハ此話を聞て心裡慥しみ思ふ。妙なる容貌好女三四人。客まふ酒肴を進めくるゝ。これを辞退して貌なりけるよ。且生間ハ濡れ衣を乾しなどと。小栗ハ想ひ儲けなる数行ハ遭ひ喜ばしくも且不安。急角おもひ頃ハ折しも前の小女再生まれり。いかゝ客人家主のこゝ春ハ入なせんとやとふ。言程ハ小栗ハ助重ハ。

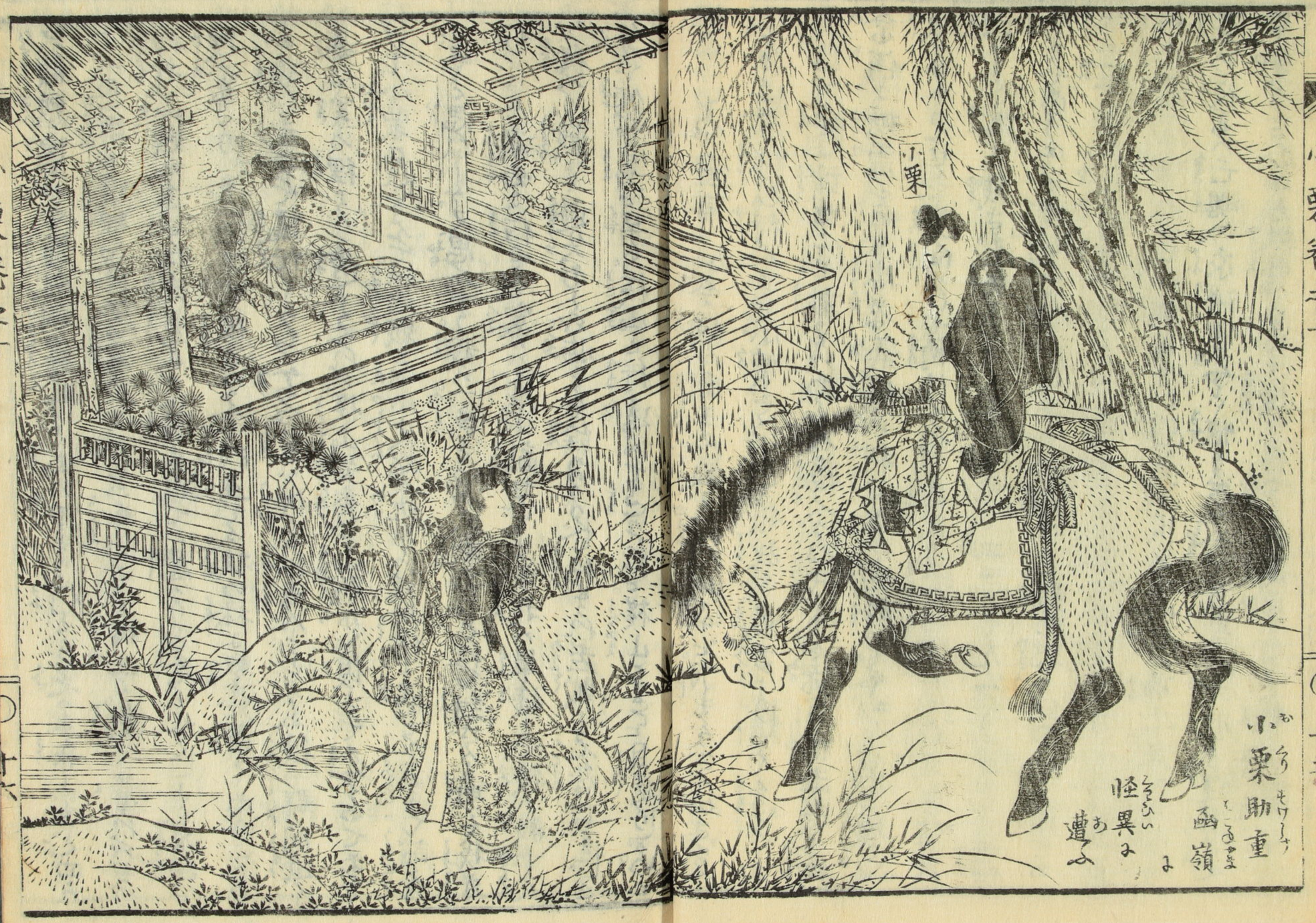
一室ハ誘引ぬるゝ。そゝくさきの茅ぶきの調度美麗し。燈明ハ明かゝ。かゝげ行ふそれより少しく片隅ハ寄りて。屏風建る下ハ年紀二十ハ。足くびとおぼしき女の美服を着て。恥ゝひきかくし。脇きを展くをうるふ。麗眸ハ涙を輝し。絳唇白ハを含む。眉ハ楊柳のなかゝを欺く。良を美容の花ハ如なる。肌を雪光と漆。腰ハ束縛の如く。雲間を洩て晴ル居ハ月よりも美しく。紅粉を粧ひて。素を自ら輝き。蘭麝を薫くさぶ。霊香鼻を撲ぐと。石心鉄肝の小栗も。恍忽として夢のごとく。家朧として醉るが如く。忘然ハ。勇ハれと。不意豪傑の助重。安くも放心をなる。嗚呼恋なるハ我幼ハ。今宿志を果さんと。東国へ行ハ途ハして。斯ハ所の動くことハ。暫ハ速ハ此所を去ハ不如と。言語をこゝ。ハ。主人奈何方とぞんじ。ひとり女性ハ。今宵不意

旦款待に遭ひて感謝を述ぶる処に、基こゝに急ぐ旅路まぐれば、主人
出かゝり、今夜の礼に宴を設て篤くもてなさんと、立出んとせしを傷なきりの女
慌忙く袖ひきとめて、いろふ急じ、旅なりとも、ちやこ更ることを
おぼえなく、さらねども夜道に物憂りのとゝめ、此処に山ふかき所にて猛獣
鬼魅の類行路に居るとて、旅人にさらに去地に居るりのとても絶く
深夜に行りのほれ乞まゝに、今夜に此家に止宿すべと云ゝ、このまゝ
に芳志忝くに付れ、此山中の光景を知て通る一人旅奈何、幸に遣て
そ。郷厨のいと云ゝ、まとも去んとせ、只願止めて歌されば小栗ふく
怒を裝ひ、こゝやまとゝ云ゝ、某今夜は宿りされ縁故に成生
知らしやとゝ、宴席より霧の如く斯て、廣手なる家に女性のみにて、ふと
ひと心を汲まれ基衍作恵に非ゝ、此所に宿りんと世の洮汰も口惜ふ

辞ぶるゝ。いつ女いうち踏に宜ふとこと道理なぐ既に最初より此方に
居ることりあんて良財を移しまつり、やや只今去ふとも五十歩百歩に付ふ
ぞ。いざ誹謗と免まるん。今夜は非に止宿の人小栗に物云さみのこと
思く。言語を中て云ふ人に知らね前こそ意まれ用まれ今既に知らん。
いざ此家に居ぐ。此日人に知ぐとも君子に冥くの為に節を失ふぞと
やことも仕ぐるら。仮条止りのぐと。袖に拂こゝ立上ると主の女房面に揚げ客人
いろ〻辞まるとよ。ちんこを此所に拒くこと過世の契あればなり。奴家こそん
忘れるふやと云ふ。熟ぐこと、これば不思議や去る比今世と去り新児
形りこゝとも奈何と惜魅さり。のふ恨めしの我殿よ。照天姫の様に比べ
いつの秋とそ一夕野の草れ拒くふなりし妹脊のうるくふ昔の情を今の
身の仇と思ふ胸苦しく涙の淵に洗して絶ふ重き罪となりく

先日もあふさ松ふいとそろ形くも世を去りて死出の旅路ふ身ハ行ど公を
今世ふ止まりて。浮ともふふね悲しさよ。されども思ふ念力の今月と夜けひ
好く殿を此丙へひきはしるこ今より奴家とりうともに冥府へまりまへやと。
小栗の袂ふ取さぶり流涙なして恋さわれば。助重前刺よりまを又ハ双眼
閉こ居こりしが。やゝ果てく后目を開ハ唱呼浅猿。花児よの。照天ハ素より
親くの許嫁せ。我妻なり。そこの縁ハ仮初ふ結びも果ね間ぞしそを
年へどもなくくふ。照天姫を妬まゝ。思ひ恐りて我と身を失ひたるこそを
鈍し愚なり人なりとも。死していとも明けゝと侍へやつるとあるゆ今云
やへる道理とよく聞こえく迷ひを晴し。成仏得脱せよしと云ハ花児ハ
新ふり上恋めしちふふちえう。照天姫もふふち孫の縁しを得こは
縁ゆしうら。奴家も同じ半なるふやへねとを宜ふぞ。やへるふ処ふ

奴恋ぶいふ壁言ふ。只今殿を閻王の廳ハ伴ひ此るを。明まうさんいぎの人
とまとり伴ひ行ん。とを小栗ちうまと振放ち。最前よりしてふへくふ
言語を尽し諭せども。耻ふ知めくふ愚人うれ。我ゆを添き宿志あり。汝
奈何ハ妖祟をとも。忠孝義膳の利刀とり。切拂へでやくぞと腰刀を
抜ともえ也ど。生ふ向うけて斬ばくれば。花児ふ姿ハ忽然と。焼失なんと式
消こく。跡も残さど失おり。小栗を念とこにも。左右をえまぞこ大何
今までのりたる待女ふ家居もともに消くと。霜の初日にあくゆく消ぞの
跡ハ彼れさ。古辻堂の裡うれば。愛ふ夢ハ心地して。呆然として居こりしが
此時秋既ハ明人とし。山端ちくいなれば。じめて心已ハ帰ゝ。思惟ハ惜
前の夜ふハ亡魂の。涙ふ泣おまく悩ませり。今まと斯る奇怪ハ運命
申斐なき仏ゆ。妖魔の為ハ慢くふ。女ハも尚劣まと。我と已と恥ひく


小栗
小栗助重
函嶺
怪異
遭ふ

只顧慙愧うつと歩行朝霧晴るく山の下より何とも定かなる弁まなど四五十人の一群が這裡とさしてすゝりしゝべこゝ仏ぐるぞと伸上り熟く着れば七の扮打山賊めきたる光景なれば迂闊られては悪うと走くんとしく鬼神と捜索りしに二三十歩彼方なる一村立てる杉の林より数ま出くありしゝぐ仏ぢび走去て慌忙くうちあつ笠を傾け地走んとするに彼一群間近く寄て笠の裡より透しゝれば横山安秀が山賊ホと倶してあるあてあてけるに小栗これとゝて此老賊永ホ夫婦が仇なれば此地に遇こそ幸し詞を設ぐと思ひしぶ又思ふ我ハ一色とふ大敵あり之を討ざる前を我身那ぐくも永久に仕せぢ寡ハ寡ふ敵せぢと今我ハ単騎にて彼ハ数十人を従へ戦く過失あくべ悔とも注ぐるべ仇まれ老賊に見咎らるべと笠と傾け馬を早め横山と行遠かてこゝ横山こまと目送りがぢと不審うるおりしに左右を顧只今此所をる去りし旅人がありしは馬ハ我少く面深ありこれ為ある旅人ぞ不審それあれ留めよと下知されば承りぬと山賊多く声こふやよ旅人云へきことあり止り給と呼ぶ後背より追矢ふ後れく来る山城もこれとうるより縁故ハ那ねど小栗が馬前を遮り脱しハせじと止めたり小栗これを聞て言ともいつと鞭を揚馬を躍らせ對しふる山賊を家かれば名を負ふ鬼駲荒也一喜嘲ふ元蹄を飛し猛り怒く及對を人を噛を蹴倒しゝ縦横をて行し走るべ山城どもハ恐怖して近寄りのハ なりけ横山安秀首より此光景を窺ひ見此馬ハこれ鬼駲なり去る年小栗亡し后その行衛を知らぬ由ありしが只今此処に見とこれば今馬を家族人ハ死せしを偽りて小栗ぞやあんどらん庸われば我流き仇なり今除るべ後大なる害ぬらんと下を励ま嗚呼云田斐なきのぞもかな

ふめきらひ弓をとりて狩をしたまふ。やがて下知をくだされば、後ろをとりし山賊ふ見ふ
ちりく力をはげる孫をし腰辺ふ佩うし。半弓をとりて取囲こ散々ふこと射うり
くふ。ふくも馬も猛しいと。雨より繁くなれば前先ふ。敵對ひらもあくして赤素
戦を好まざれば一道の生路を求めて走りしふ忽ち狭き谷間ふ出うり此ふ至て
賊も追ひどなりうれば。此西よりして薪ふ出ぐやと馬を歩せ行くはふ前途大き
ちなれ池あり。ふ中煙くと煙ふら佛上る音谷神ふ響て正ふ人の泣悔ぶ
声ふ彷彿ふり。ふ栗これをうらふ。此山ふ温泉ふ出ぐ。きらめて硫黄多ふらん。
願れば此水中ふも硫黄ふて。常ふ焼ふをりて水自ら熱湯となれるうらん。
世ふ昔より此山ふ焦熱地獄ありと。ゆめ〳〵これらのことを云うらんと躊躇延
ふ猛然と側ふ高き岩上より。走雷のごとく鄙響て遠煙ふ上り。熱湯俄ふ
佛生うり。鬼神とれふ猛ふて荒あぐり。一散ふ池ふ生ぶ。奈何ーとう嗜換ふん。熱湯の

池ふ飛こんぶり。小栗ふ。ふもとふ倒こ操り。ある岩の上ふ躍揚りしふ主さる
ぶうの熱湯ふ勢射も入ーこなれば。馬も毛ふ身も皮彼れ肉爛痛ぶがらく。
少しも動くこと能ぬど。小栗心猛ーとらんど。今ふ伏しも泣ぶ。日ひ仕ぶる
記ふ。今日の難と救ひ給ふ人と。心中ふ念じ。鬼神ふ對ひて云うり名ふ。汝を
世ふ類ひなれ名ふるれば。今いまとと恥てけよ。今の不幸此難ふ遇て命の危
きふ斯く死もせば徒死ーて汚名を永く残さんーいふふ無念のうめきぶ。昔
劉先主の的盧馬ふ主と助けて芳名今ふ著し。況死を辞せど我を救て人里ふ
出さば開運の附至ぶ。馬ふ記音と崇め。泉を易うふ。今世ふ美名を揮
ささぶと人ふ對て言ふ。熟くと笑へーぶ。実も名るのことなれば此言ふ
敢て云ふ死ぬべうふ。鬼神の俄然として勢を生じ。鞭を加へざるふ躍揚り。
矢と飛るごく池生ーぶ。廿丁ばかり風て勢ふ。がいと倒れて死てうり。是則此ふ

當山の裡なる芦の湯場にて人家ある処に小栗は馬より下て鬼神が忠死を感激し、そぐわる涙を流わろ。此上なるの忠義を、お下にせどさうべきにとゝろめ。鬼神の屍を収検。その上我身の傷を治療せどもと人家ある方へ往んとすれど、えゝの射わどもいろあせんと思ふ処へ遠より對ひよう市女笠を着たる女の一人の侍子を倶したゝが這裡をきして歩みまわれば。是も死幸し此人を教えて人家を生ぢやと行くろう。抑小栗わどの者海をわも山野を歩し。手負を傷はるゝとゝ奈何正よ冤児が怨念の祟る不ふるべ。此后何ろう有。又今世不幸なる一人の仏ぞ。是ゆるの人ど是等のるゆへ往く分解る。続く知る人は

小栗外傳卷之十畢

軍書小説類藏板目録　大坂心齋橋通南久寶寺町　伊丹屋善兵衛

源平盛衰記　片假名　廿五冊
後太平記　片假名　廿五冊
殘太平記　同　十二冊
四國軍記　同　十二冊
一名土佐軍記
駿臺雜話　平かな　五冊
室鳩巣翁の著也すべて仁義の大道を示し鬼神の説和漢古今名將勇士の名行を評し治乱の要術任法和哥詩文の論説老儒の見あり
續武將感狀記　同　十冊
楠正行戰功圖會　平かな　十一冊
聖德太子傳圖會　平かな　六冊
太田道灌雄飛録　六冊
左衛門大夫太田持資入道道灌三位中將政卿の後裔なり扇谷上杉氏の家臣なり文武の業すぐれ勝れ聡明なる一世の戰功忠義を委くしるす
畫本西遊全傳　四十冊
繪本玉藻譚　五冊
同白狐傳　十冊
一名あやつり物語

復讐岩見英雄録　全部　五十冊

此書三編まで作者各譬より四編以下廿九冊
世俗のいひて傳る安殺の安奈と葛葉がさまをば
おもしろく仮名紙にあり

結説の主人公と成るハ勿論にて鈴木堂の五傑と
称する勇士の傳を附して由良山獄の賊後到流天
橋立の復讐を頗る作者の新案を費せり
七編ハ結局にて餘計の一卷あり八冊をもて一部とす

刀筆青砥碑　八冊

此書水戸藩語ハ椿亭子の原稿を曲亭翁の
筆削せし所なり其ハ医人名手刺絲孫
て愛妾を殺し狂も奸夫偽二郎を瞞うて
盗賊くと誣ひらへて殺さんとせしを青砥藤綱が
明断各その罪を照て懲せる佳話妙案なり

蛍木室の八雲　八冊

下野国生の岡城主生駒の家臣平四郎國紀
が忠心遠孫の新平左衛門が妖術妖婦夕顔
が忠孝を面白くのせり

同金毘羅神霊記　十冊
同誠忠傳　十冊
同孝感傳　十冊
同顕勇録　十冊
同奇縁傳　十冊
同忠孝美善録　十冊
同伊賀越孝勇傳　七冊
三門復讐檀之二葉　六冊
同合邦辻　十冊
同亀山話　十冊
同彦山霊験記　十冊
同浅草霊験記　十冊

鎌倉年代圖會　五冊

教経郷鎌倉の創業より宗尊親王の下向
まで故て源軍家五代の間の時事を委
くしるせ

鎌倉大樹家譜　五冊

宗尊親王鎌倉に着御より累世執權秩
悪の女雄北條が一門亡びて後醍醐帝天下を
平定し給ふまでを載る

武蔵坊辨慶異傳　十冊

往世中が水滸傳の面目を摸て変化せる
説向あれば甚興ある小説なり

大内多々羅軍記　六冊

大内義隆の孫奇風流より譬ば桐良武侯が
佞幸浪人服部を罪ふ論れを妻を君に進

むるの妖婦生弱の方ゞの蒲尾張の睦奥が大悪逆ゆゑと正史より出入せる面白記稗史あり

近江縣物語　五冊

花山院の御代ゆゑとう坂上梅丸が金偽うーく盗賊為系保輔斎明が残暴より橋安世ゞの女因生が奥操安世が甥常人が邪慾腰病のゆ梅丸ゆゑ光貞を謂ーてゆう賊徒征伐の大将軍為系保昌を助けて賊を平らげ絶ゆ近江掾ゆ進み生の父母ゆ逢ーし住佑ゆてその父の妙ゆるゆ図ーて知るべー

昔語松虫墳　六冊

建武の頃浦の阿幼世の勇士野田太郎清系氏安が武勇妹桂子ゆゑ継母楓が奸淫安井隼太が隠悪妻田勝美義里ゆゑ世田の家ゆゑ木浦孫八が妻松女が狂弘木浦孫太郎ゆ和嬉の遊女梅木が孝心松虫墳経塚ゆとの由来をあらす

奥州小白屋の民篠崎三郎右衛門ゆゑ千田民弥を欺紀て松田伊織ゆ斬せーゆ松田夫婦と民弥が弟民弥が義死見ゆが寃魂民弥が庶子民五郎ゆゑ童ゆ憑て復讐させーゆを報せり

北野天満宮霊験　二葉の梅　六冊

賊弟の宮賊池上七九郎が寃悪のゆ孝子菊女と上田芝之二郎が復讐ゆゑ知ーて悪ゆ年岩見三之亟義侠の老人亟教訓ゆゑを綴りゆのせり

報恩珠話　十かえる花　六冊

建久年中ゆゑ出羽の山縣の郷士常盤井内記素兼則ゆ二男瀧三郎美人ゆ仙郷ゆ誘れて教ゆゑ文け後年諸芸を取ーてゆ仙ゆ山伏ゆ討ちて山女去来見と昇天ゆゑ奇話高ゆゑ

今昔二牧繪帖紙　六冊

天文の頃ゆゑ播磨国三木の城主別所長宗の家臣藤崎兵右衛門女子ゆゑ美少年微山龍松ゆゑ遠原勇義ゆゑ瓶松三郎左衛門ゆ奸悪ゆゑ高村の俳優ゆゑ義気ゆゑ絶ゆる話ゆゑ

矢口續話　新田神霊　忠孝貞婦傳　六冊

大庭伊織信経八股田殿右衛門ゆゑ計ーゆ中ら自宅ゆゑ妻の里ゆゑ家隷ゆゑ田罰助ゆ貞烈忠勇ゆゑ寃死ゆゑ系譜ゆゑ

復讐千丈松　七冊

近江の士松井逸翁派人篠村大義ゆゑ欺後れ茅両人ゆゑ年寃家ゆゑ窺ひ青柳佐市友ゆゑ阿波の篠村ゆゑ志ゆゑ遂ーゆ信ゆ

忠孝人龍傳　五冊

補家外傳　弥生佐久羅　六冊

補家の良臣恩地左近ゆゑ女児弥生ゆゑ佐久羅八佐久兵庫ゆゑ狂死ゆゑ子源一郎ゆゑ胆勇敢孝の誠を除死又浦田の里ゆゑ裕富ゆゑ女児向ゆゑ寿遇松系軍ゆゑ騙欺秋山大膳ゆゑ縁及八尾雷童丸ゆゑ滅亡孫八郎ゆゑ敵をのべり

骨董雑話　花標因縁車　五冊

小鐘半左衛門ゆゑ小金と彦兵衛ゆゑ仲ゆゑ迷ゆゑ煩悩ゆゑ常念法師ゆゑ乃京ゆゑ塚ゆゑ因縁ゆゑ怪ゆゑ

玉擂頭　五冊

三老の擂ゆゑを主ーゆゑ話説ゆゑて上野の国高井土の呉服屋十右衛門ゆゑの衰ゆゑ再興ゆゑと上方ゆゑ出て商ゆゑ挽ゆゑ終ゆゑ二百両ゆゑ金を携ゆゑ帰ゆゑ路楢井山ゆゑ強盗ゆゑ

繡像復讐石見英雄譜 全部 五十冊

南海 玉藻主人 編輯
浪花 一蕚富歌川芳梅 画

○初編 京師人作 ○二編 玉藻主人嗣著 ○三編 東陽子嗣著 ○第四輯以下作者一家

永禄天正の間筑紫名嶋の三男士岩見重太郎橘種李が生ちより武者修行せし一冊の武功大蛇の害を除き老狸の妖を殺めし勇威を語り後は天の擣衣ふく廣瀬威淵大川小三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し終ふ室町殿ふ奉仕て任官し終ふ玉水正ふ嫁聖ふる毛間ふ雪堅拳豪ふ女邪婦岩瀑孝女新月ふ女鈴ふ黨の五雄と称する勇士の列伝霊猿悪魚の怪談ふ五輯よりハ益入佳境新話多り

南久寶寺町心齋橋ふ入
浪花書肆 伊丹屋善兵衛板

紅葉堂藏書

紀州の士人東條図書幼年にして父助を失ひ仇山中牡三郎を年久しく伺ひ獲り復讐せしを和州郡山より復讐せし事実を録して名常の伝奇孝紙に実あり

南部をぐりこうき 小栗忠孝記 五冊

敵討

奥州南部の士竹内新吾門藩ふ新参の士小栗毛平と猜み窃ふ人をして討殺させ小栗が後五助終ふ手後拠をさぐり得て阿波ふ和き生の妻子ふ告知せて小栗百二郎ふ悉く父の仇を報せし孝実あり

長崎聞見録 五冊

理齋随筆 六冊

和漢の雑事何れとなく載られたれば世ふ伴益鮮少ふ一読閲して聞見を弘くすべし

金屋金五郎全傳 五冊

浦花堀江の市人金五郎が風情あり武侠ある南妓額の小三が情実の縁まもなくして板半時淵左衛門が癖性の可恐き後ふ半時庵陸と号して郷人ふ多の一小説あり

輪廻物語 五冊

安倍仲麻呂唐土ふ流唐より安名と萬葉の時明石海が多くの悪く俗説の作る紙を以て張本とし浮屠陰陽両ふ家の説を附会して荒唐なる小説奇怪の結構則ち和漢の史外ふ出し奇話と云べし

風流茶人氣質 五冊